

2025年2月6日 「ドストエフスキ全作品を読む会」第326回 開催報告

場所:としま産業振興プラザ

テキスト:『罪と罰』第4回

報告者:松浦洋さん

参加者:7名

### 報告内容

- ・ 『罪と罰』におけるハイライトシーンというべき場面5つを取り出し、各シーンを松浦さんがおよそ1時間かけて朗読。

### 5つのシーンは以下の通り。

- 1 場面:ソーニャとスヴィドリガイロフが初めて顔を合わせる。二人はカペルナウモフの借家で隣り合わせに住んでいることがわかる。  
ソーニャ→17歳、貧しい家の娘、「黄色い鑑札」を受けて商売をしている。  
スヴィドリガイロフ→50歳くらい、金持、しゃれた恰幅のよい紳士。  
読者は両者のコントラストに目を奪われる。
- 2 場面:ソーニャの部屋でラスコーリニコフはソーニャに、アリョーナとリザヴェータの殺害を告白する。  
ソーニャはラスコーリニコフに「十字路に立ち、跪いて大地に接吻し『私が殺しました』と言うのです」という。  
ラスコーリニコフは「頭と心が強固で力あるものが支配者になる」「僕には人を殺す権利がある」という。  
両者の感覚、感性、考え方のズレが鮮明になる。
- 3 場面:スヴィドリガイロフとラスコーリニコフの会話。スヴィドリガイロフはラスコーリニコフの妹、ドーニャに心を寄せていることを話す。
- 4 場面:ドーニャは鍵をかけられた部屋にスヴィドリガイロフに閉じ込められ、追いつめられる。彼女は拳銃を取り出しスヴィドリガイロフを撃つも弾は逸れる。
- 5 場面:スヴィドリガイロフは安ホテルに泊まり、マルファの夢を見ることなく、感慨にふける。

5つのシーンについて参加者は感想、疑問を出し、ディスカッションする。内容、疑問は以下の通り(順不同、必ずしも疑問に対する回答にはなっていない)。

疑問:ドーニャはマルファの家で家庭教師をしていた。そこでスヴィドリガイロフに出会うのだが、この時点で両者の間に性的関係はあったか、なかったか？

↓

あったという参加者となかったという参加者はそれぞれ半数ずつだった。

- ・ 「あった」という根拠→スヴィドリガイロフがドーニャに対して言った「夕暮れで月も出ていた、それに驚も鳴いていた」というセリフがその場面を表しているから(テキスト江川卓訳 p456)。
- ・ 「なかった」という根拠→スヴィドリガイロフが安宿の述懐で「あの女ならおれを何とか叩き直してくれたかもしれない」と考える場面がある(テキストp456)。→スヴィドリガイロフは作者ドストエフスキーに最も似た人物と言われる。もしドーニャとの間に性的関係があったなら、スヴィドリガイロフ(ドストエフスキー)はこのような思いに至らないだろう。このセリフはスヴィドリガイロフ(ドストエフスキー)がドーニャの精神性を信じ、人生の立ち直りをしてくれる人物だと期待している。このように解釈するなら、スヴィドリガイロフは性

的關係よりも精神性を優先させていた。したがって、これ以前に性的關係はなかった。

**疑問:**ドーニャが向ける拳銃の前に立ったスヴイドリガイロフはどのような心境だったか？

- ・「こいつはもう思い切らなくちゃならん」(p456)というように、ドーニャを諦める心境になっている。

**疑問:**スヴイドリガイロフはなぜ自殺したのか？

- ・スヴイドリガイロフは「老いたスタヴローギン」と言われる。だが、スヴイドリガイロフのほうが年配。スヴイドリガイロフはソーニャの弟妹を施設に入れるよう取り計らう。また、ドーニャを本気で愛していたなど、極めて人間的。
- ・対するスタヴローギンはマリア・レヴァートキナと見せかけの結婚をし、彼の本性をマリオ兄見抜かれるなど、人間的に墮落している。

両者の行動、性格は大きく異なるが結果として二人とも自殺する。その動機は大きく異なっていたと思われるが、話し合いでは結論に至らなかった。

### 次回予告

ディスカッションの内容は多岐にわたっていたため、時間切れとなった。松浦さんのレジュメにはモチュリスキー、小林秀雄、江川卓などの評論があったが、これらには触れることができなかった。したがって、話し合われなかったこと、触れられなかった評論に関しては次回で取り上げることとした。

### 次回

日時:2025年4月12日(土)14時から16時45分

場所:文京区勤労福祉会館(JR駒込駅より徒歩15分)

報告者:松浦洋さん

内容:2月6日のレジュメの続き